
アングロ・サクソン時代の聖書翻訳の企て

——教育改革と宗教改革

小林茂之

本稿の目的

本稿は、アルフレッド王が行った教育改革やその後のアングロ・サクソン時代の宗教改革の観点からアングロ・サクソン時代の聖書翻訳の性格について、教育改革と宗教改革を目指す企てとして明らかにすることを目的とする。^①

一 アングロ・サクソン時代のブリテン島の歴史とキリスト教

一〇六六年のノルマン人による侵攻によって、イギリスはノルマン公ウイリアム一世によって統治されることになった。この事件は、現代までのイギリスの歴史に直接継承されているという点で、イギリス史の上で最も重要であるとみなされている。

それまでのイギリスは、ローマによる支配が終わった後のアングロ・サクソン時代であった。^② ベーダ『英国教会史』の記述によれば、ローマ軍に代わってブリテン島を^③外敵から守るために、^④四四九年に招聘されて現在のデンマークのユトランド半島からブリテン島に來たアングル人・サクソン人・ジュート人というゲルマン民族の支族が居留し始めた後、武力でブリテン島を支配することによって成立した。

アングロ・サクソン時代のブリテン島は、ゲルマン民族の文化を基盤として築かれた文化の上に、キリスト教の伝来、特に教皇グレゴリー一世がオーガスティン^④をブリテン島に派遣し、五九七年にブリテン島に上陸し、ローマ・カトリックの布教を始めたことによつて、ローマ・カトリックのキリスト教によつて文明化が進んだ。なお、ローマ・カトリックの他に、アイルランドのケルト文化の影響を受けたアイリッシュ・キリスト教がスコットランドやノーサンブリアでキリスト教の布教を行っていたが、六六四年にウィットビー宗教会議でローマ・カトリックに統合された。

こうして、ローマ・カトリックは、ケントのカンタベリー、ノーサンブリアのリンデイスファーン島(Lindisfarne)の修道院を始め、アングロ・サクソン文化を文明化し、キリスト教文化がブリテン島で繁栄の時期を迎えたが、七八七年に初めてヴァイキングがリンデイスファーン島を襲撃し、九世紀にはヴァイキングは南部のウエセックス王国を除いてブリテン島の全域を襲撃し、キリスト教によつて文明化されたブリテン島は荒廃の危機に瀕した。

ウエセックス王国のアルフレッド王(在位八七一―九九)がヴァイキングとの間にデーン人の法律が適用されるデーン法地域を認め、イングランド南部をヴァイキングから守ることができた。

アルフレッド王は、ヴァイキングの襲撃で荒廃したブリテン島の復興に際して、ラテン語原典を古英語に翻訳するなど、文芸を奨励し、文武に優れた業績をあげて後に歴史家から「アルフレッド大王」と呼ばれることになった。

このアルフレッド大王の政策が、イギリスのキリスト教を大陸のローマ・カトリックから距離を置いて、アングロ・サクソン文化とキリスト教文化とを融合に導いたと考えられる

二 アンゲロ・サクソン人のブリテン島への居留と侵略

歴史家である尊者ヘーダは、アングロ・サクソン人のブリテン島への居留の経緯を次のように記している⁽¹⁷⁾。

Dā wæs ymb feower hund wintra and nigon and feowertig fram ūres Drihtnes menniscnysses þæt Martiānus cāsere rice onfēng and vii gēar hæfde. Sē wæs syxta ēac feowertigum fram Augusto þām cāsere. Dā Angelþeod and Seaxna wæs gelaðod fram þām foresprecean cyninge, and on Breotone cōm on prim miçlum scipum, and on ēastdæle byses ēalondes eardungstowe onfēng purh ðæs ylcan cyninges bebode,
þe hi hider gelaðode, þæt hi sceoldan for heora eðle compian and feohtan. And hi sōna compedon wið heora gewinnan, þe hi oft ær norðan onhergedon; and Seaxan þā sige gestogan. Þā sendan hi hām ærendracan and hēton secgan bysses landes wæstmbernysses and Brytta yrþo. And hi þa sōna hider sendon mārān sciphere strengran wigena; and wæs unoferswiðendlic weorud, þā hi tōgædere geþeode wæron. And him Bryttas sealdan and gēafan eardungstowe betwih him, þæt hi for sibbe and for hælo heora eðles campodon and wunnon wið heora feondum, and hi him andlyfne and ære forgæfen for

heora gewinne. Cōmon hī of prim folcum Dǎn strangestan Germānie, þæt is of Seaxum and of Angle and of Geatum.

(Bede's Ecclesiastical History (Old English version))

主のご托身から四百四十九年、マルキアヌスがアウグストゥスから数えて四十六代目の帝位を継承し、七年間これを保持した。この治世中にアングル人とサクソン人が先に述べた王に招聘されて三隻の大型軍船を率いてブリタニアに渡来した。ただちにブリタニアのために戦ってほしいと要請され、居住地として島の東側の地を提供された。これまで頻繁にブリタニアに侵入してきた敵とただちに戦いを交えて勝利を得たサクソン人は祖国に使者を遣わし、ブリタニアは肥沃で、原住民のブリトン人は臆病だと伝えた。時を移さず、いつそう強力な兵員で編成された大船隊がブリタニアに来航したが、その軍勢はいかなる抵抗をも圧倒するほど大規模なものであった。ブリタニアの平和と安全のために戦うという条件をつけて、ブリトン人はサクソン人に居住地と食糧を提供した。

外来部族はゲルマニアにあつてもつとも強力なサクソン人・アングル人・ジュート人であった。

(ベータ『英国教会史』(高橋博訳二〇〇八・三八―九)

ベータは、ノーサンブリアのジャロー (Jarrow) の修道院で一生を過ごしたようだが、修道院はアングロ・サクソン人の王の保護の元にあつたので、アングロ・サクソン人がブリテン島に居留することになった経緯はブリトン人の王に招聘されたとする記述はそのようなキリスト教の宣教の立場から書かれていると理解すべきであろう。

アングロ・サクソン人は、勇猛ではあるが、元々はキリスト教文化とは異なる文化的背景をもった異教のゲルマン民族の集団であった。

アングロ・サクソン人の居留を認めたブリトン人のあいだでは、ローマ帝国のキリスト教の国教化によつて少なくとも上層階級の人々に限れば、キリスト教が普及していたと考えられる。⁶⁾

三 聖オーガスティンの派遣

『アングロ・サクソン年代記』は、アルフレッド王が各地の修道院に命じて制作されたもので、MS.A写本は現存する最も古い写本である。⁷⁾

[595] AN. .dxcv. 7Her Gregorius papa sende to Brylene Augustinum mid wel manegum munecum þe Godes word Engla ðeoda godspelledon.

(Anglo-Saxon Chronicle MS.A, Bately (ed.) 1986: 25)

五九五年。この年に、教皇グレゴリーは、ブリテンに、非常に多くの修道士とともに、オーガスティンを派遣し、修道士たちは、イギリス人に福音を伝えた。⁸⁾

(『アングロ・サクソン年代記 MS.A』大沢一雄訳一九九一：一二三)

ペーダ『英国教会史』によれば、聖オーガスティンの一行は歓迎され、ケント王エゼルバートから援助を受け

て、キリスト教の布教も許されたため、ブリテン島のキリスト教化は急速に進められたが、平和的に行われて、殉教者は出なかった。キリスト教が普及した後に書かれた歴史書において殉教が起きたという記述がキリスト教信者の信仰の強さの証として書かれる通例からみると、アングロ・サクソン人のあいだで、キリスト教に強く抵抗するような宗教的信念は無かったかもしれない。⁽¹⁾

四 リンデン語聖書の古英語翻訳

ブリテン島に伝えられた聖書は、十一世紀には福音書 (*Anglo-Saxon Gospels*) と旧約聖書の中の『七書』 (*the English Heptateuch*) に古英語で翻訳されたが、このような翻訳は徐々に段階を経て進められてきた。ブリテン島においてそのような翻訳が認められた背景は、大陸とは異なつて教会の公用語であるラテン語だけが使用が認められたのではなく、古英語の使用に寛容であつたと考えられる。Stanton (2002) から引用する。

[The oldest known Anglo-Saxon school did not forbid the use of Old English words in interpreting Latin texts. So although no full-length English translation survives from before the ninth century, English glosses were clearly used alongside Latin ones in the education of English monks and clergy in the seventh and eighth centuries.

(Stanton 2002: 34)

聖書の古英語訳は、最初から翻訳が試みられたのではなく、原典のラテン語に古英語の語彙が付されることから始まったのである。

Stanton (2002) から続けて引用する。

It comes as somewhat of a shock to see the gloss to the opening words of the Christmas story in the Lindisfarne gospel of St. Matthew: *Christi autem generatio sic erat cum esset desponsata mater eius Maria Joseph: the huge decorated letters XPI (for Christ) spill across the page, full to bursting of spiral and interlace patterns, and a tiny cristes perches atop the X. The Old English soðlice, “indeed,” nestles above the autem of the second line, in the curve of the same X from line 1. In a space between the long stroke of the X and a trailing section of ornament is a commentary gloss on the genealogical section of Matthew: *uitedlice suae was cristes cneureso, “truly, such was Christ’s genealogy”.* Furthermore, there is a quadruple gloss in the fourth line: *desponsata, “betrothed”, is glossed biwoedded † beboden † befastnad † betahht. The first gloss, from the verb beweddadan, means quite specifically “to betroth” ...**

(Stanton 2002: 50–2)

有名な装飾写本で、大英図書館で保管・展示されている『リンデイスファーン福音書』のMatthew書の冒頭のXPIページにも、語彙が付されている⁽¹⁾。

Stanton (2002) から続けて引用する。

The very appearance of the gloss in such a manuscript underlines the blurring of the distinction between the canonical Latin text of the gospel, presented as primary and iconic, and the act of interpretation to which the gloss leads. The interlinear gloss is, in a way, the ultimate service, especially in a book like Lindisfarne, where the Latin stands out because of its high-status script and elaborate illumination; but by performing the gospels in English, the gloss becomes like a domestic servant imitating his master in his own language.

(Stanton 2002: 53)

写本中では、行間訳 (interlinear gloss) は象徴的なラテン語と古英語訳との区別があいまいになる。しかし、『リンドイスファーン福音書』のような装飾写本では、ラテン語が優位であり精緻に装飾されているのに対して、英語で福音書を朗読する場合、古英語訳の語彙は国内的にラテン語の模倣となる。

Stanton (2002) から続けて引用する。

[T]he beginnings of vernacular authority in the way Old English glosses imitated Latin vocabulary, syntax, morphology; they began as aids to learning Latin, but ended up teaching a great deal about English as well. Glosses built a store of unique vocabulary for later writers ... the main stream of the

Old English lexicon, on which better known writers such as Ælfric and Wulfstan drew. Ultimately, English could even be used for the very important task of teaching Latin grammar, as Ælfric showed with his bilingual Grammar. Similarly, the tenth-century gloss to the Lindisfarne Gospels shows the intrusion of English onto the sacred page, a further authorization of its use as an interpretive tool. In the end, it was the power of English to act as an interpreter of Latin language

(Stanton 2002: 53)

ラテン語を模倣した古英語語彙は、アルフリッチやウルフスタンのような後の古英語の書き手にとって無類の語彙の蓄積となった。一〇世紀の『リンデイスファーン福音書』に付された古英語の語彙は英語の権威を表し、それは最後に英語がラテン語の翻訳言語として行使される英語の権力になった。

『リンデイスファーン福音書』の豪華な装飾が施されたページを見ると、ラテン語に付された古英語の語彙は装飾を損なっているかのように感じられる。しかし、アングロ・サクソン時代に古英語がキリスト教の言語としてラテン語の翻訳言語としての役割が確立されたことは英語文化史上の意義と、そのフィードバックとしてのイギリスのキリスト教の独自性の原点として注目されるべきである。

五 アルフレッド大王以前の古英語聖書文献——「十字架の夢」

聖書そのものが古英語に翻訳される以前に、聖書的主題が古英語詩にされるといふ宗教的・文学的営みが行われ

た。中でも「十字架の夢」(The Dream of the Rood) は、『ヴェルチェリ説教集』(the Vercelli Book) に収められている有名な古英語の詩である。詩人の夢に、イエスが架けられた十字架が現れて、イエスの受難を語るという内容である。以下に現代英語訳を引用する。

Listen, I will tell the best of visions,
that came to me in the middle of the night,
when voice-bearers dwelled in rest.
It seemed to me that I saw a more wonderful tree
lifted in the air, wound round with light, the brightest of beams. ...
There I did not dare, against the word of the Lord,
bow or break, when I saw the
corners of the earth tremble. I might have
felled all the enemies; even so, I stood fast.
He stripped himself then, young hero - that was God almighty -
strong and resolute; he ascended on the high gallows,
brave in the sight of many, when he wanted to ransom mankind.

(Treharne (Ed.) 2010: 121, 123)

「十字架の夢」のような古英語詩はどのような宗教的性格を持っていたのだろうか。Lees (1999) から引用する。

[T]he implementation of the Benedictine reform offers a practical guideline to homiletic production. The earlier Blickling and Vercelli collections represent the anonymous tradition of homiletic prose, most often held to be prereform. Evidence of source study for these works indicates an emphasis on apocrypha, often featuring Insular or Irish concerns and topoi and a generally unremarkable Latinity. (Lees 1999: 25)

ベネディクト会改革以前の『ブリッキング (Blicking) 説教集』と『ヴェルチェリ (Vercelli) 説教集』の引用元は外典 (apocrypha) に重点があり、アイルランド的な関心とトポス (常用される主題) の性格を持っていた。その意味で、聖典そのものを翻訳するよりも、聖典から主題をとって古英語詩文学を創作するほうが目的になっていたと言えるだろう。それとは反対に、ベネディクト派が聖書の原典を重視する立場からは創作よりも聖典の翻訳の方が好ましく考え、翻訳に協力的であったのは必然であったと考えられる。

六 アルフレッド王による聖書翻訳——聖書翻訳による教育改革

アルフレッド王は、ヴァイキングがブリテン島全土を侵略することを防ぎ、ヴァイキングとのあいだに八七八年にウエドモー条約を結び、デーン法地域、テムズ川以北でヴァイキングの支配を認める代わりに、アングロ・サクソン人がブリテン島南部を支配することをヴァイキングに認めさせた。こうして、休戦した上で、荒廃したイングラ

ンドを復興するに際して、ラテン語原典を古英語に翻訳するという文芸政策がとられた。これは聖書翻訳を促進する契機になり、修道院の外においても教育を行うことを可能にしたという点で教育改革でもあった。

1 王権による翻訳

はじめに Stanton (2002) から引用する。

By making available to non-Latin reading people “the books most necessary for all people to know,” [King Alfred] remade the Latin canon and began the process of building a vernacular canon before Alfred, the canon consisted exclusively of Latin works. But Alfred broke down one wall and put up another: canonical works were now available in English, but the king himself decided which works were “necessary,” and hence available, in English. ...Alfred institutionalized this process on a grander, royal scale. He claimed an authority that included his own very personal shaping of cultural process and product, and he aimed to integrate textual transmission into his extension and consolidation of royal power.

(Stanton 2002: 173-4)

アルフレッド王は以前にはラテン語を読めない人びとに「全ての人びとが知るべき書籍」を利用できるようにした。アルフレッド王は王権によってラテン語のカノンを英語で利用できるようにする制度として行い、文化的過程

と生産を個人的に形成する権威を主張し、王権の拡張と強化を目指した。

アルフレッド王は、ラテン語文献から古英語への翻訳を進めることによって、知識の世俗化を推進し、そのことによって世俗的権力としての王権を強固なものにすることを図ったとみることが出来る。

2 古英語訳『詩篇』

古英語による本格的な聖書翻訳は『詩篇』から始まった。その理由や目的を検討しよう。はじめに、Stanton(2002)を引用する。

The first continuous prose translation of any portion of the Bible was that of the first 50 psalms contained in the so-called Paris Psalter (Paris, Bibliothèque Nationale, Lat. 8824); this translation is now confidently attributed to King Alfred. ... The psalter was frequently used in the monastic classroom for the purpose of teaching Latin, and it is quite likely that Alfred gave it a place in his curriculum of bilingual education. In any event, Alfred clearly intended to use it for his own education, and it is very much of a piece with his other translations in its treatment of rulership, learning, and wisdom.

(Stanton 2002: 121)

聖書の最初のまとまった散文訳は通称 *Paris Psalter* に含まれ、アルフレッド王の著作とされている。古英語訳『詩篇』はラテン語教育の目的で王室の教室で使用され、二か国語教育のアルフレッドのカリキュラムに置かれた。支

配権、教育、知恵のアルフレッドの教育の仕方においてアルフレッド王の他の翻訳と共通している。

『詩篇』はヴァイキングの攻撃から身を隠すことを強いられたアルフレッド王にとって、自らの境遇をサウル王から逃れたダヴィデに重ね合わせたにちがひなく、修道院から離れて、王室でラテン語教育が行われたのと同様に、政治が世俗的権力であるという点からも、ラテン語だけでなく古英語との二か国語教育は宗教と政治の連携を図る意味で教育改革を遂行した文治統治政策と言えよう。

3 アルフレッド王が行なった翻訳上の改変

アルフレッドは『詩篇』を翻訳する際に、改変を加えたが、これは『詩篇』を教育的目的に用いようという意図に基づいていた。Stanton (2002) から引用する。

The changes that Alfred made in translating the psalter into English reflect ... especially his relentless desire to accommodate his work to the idea of teaching. ... [I]t is by no means a slavish translation, and the additions and changes the king makes are often highly significant. The psalter is subtly altered to present a very specific image of the king as wise educator; this image is based on that of King David, whose authorship of the psalms is affirmed in the Old English introductions. These introductions are exegetically designed: that is to say, they not only point out the circumstances of a psalm's composition, but also encapsulate its principal theme and apply it to different situations in which the psalm might be sung.

(Stanton 2002: 121-2)

アルフレッド王が加えた『詩篇』第2篇の序文部分は以下のようなパッセージである。

Ɗæs æfteran sealmes capitol is gecweden Psalmus Daudi, þæt ys on Englisc' Daudes sealm' for þæm he is hys sealm gecweden for þi he seofode on þæm sealme and maende to Drihtne be his feondum, ægðer ge inlendum, ge utlendum, and be callum his earfòðum; and swa deð ælc þæra be þysne sealm singð be Mis sylfes feondum; and swa dyde Crist be Iudeum.

(O'Neill (Ed. and Trans.) 2016: 4)

The second psalm's heading is entitled Psalmus Daudi, that is in English, "David's psalm," and it is called his psalm because he lamented in the psalm and complained to God about his enemies, domestic and foreign, and about all his difficulties; and everyone who recites this psalm does likewise about his own enemies; and so did Christ about the Jews.

(O'Neill (Ed. and Trans.) 2016: 5)

アルフレッドは、その主題を要約し、『詩篇』を口誦する普遍的必要を説いている。アルフレッドは、ダヴィデの著作とされる『詩篇』の古英語版に序文を付したことで、キリスト教を教育の中心に位置づけたと理解される。

七 アルフレッド大王以後の聖書翻訳——聖書翻訳による宗教改革

アルフレッド王の孫、エドガー (Edgar, 在位九五七—七五) が、イングランド全土を統一し、最初のイングランド王となった。この間、後期古英語期に入るが、修道院長であったアルフリッチ (Ælfric, 955-1020) は「文法家」(the Grammarian) と称され、後期古英語を代表する著作家である。

1 アルフリッチによる旧約聖書の翻訳

『古英語版七書』(the Old English Heptateuch) は、アルフリッチによる旧約聖書の(最初の七書の)翻訳である。アルフリッチは、大部の『説教集』を残しているにも関わらず、聖書そのものの翻訳にはあまり積極的ではなかった。これは、キリスト教関連の文献を含むラテン語文献の翻訳事業を積極的に行ったアルフレッド王とは異なる態度である。Magennis (2011) から引用する。

Ælfric was a prolific translator of the Bible then, but he was also a reluctant one. He expresses his profound anxieties about making the sacred words available in English most insistently in his Preface to Genesis, an accompanying letter sent with his translation of Genesis to the pious layperson Æthelweard, who had commissioned it. Ælfric is acutely conscious of the spiritual depth and subtlety of the biblical text and he fears that by making the 'bare narrative' available to the untrained he will be

opening the door to simplistic and wrong interpretation:

Now it seems to me, beloved one, that the work is very hazardous for me or for any man to undertake, because I fear that if some foolish person reads this book or hears it read, he may suppose that he may live now in the era of the New Law just as our forefathers lived in the era before the Old Law was established, or as men lived under the Law of Moses ... We also declare ahead of time that the book is very difficult to understand spiritually, and that we have written no more than the bare narrative. It will therefore seem to the ignorant that all the meaning is locked in the simple narrative, but that is very far from true, (trans. Muinzer 1970, pp. 165, 166)

(Magennis 2011: 91-2)

一〇〇〇年頃、アルフリッチは旧約聖書の一部(七書)をバトロンの平信徒のアゼルワード(Ethelward)アルフレッドの後裔に当たる)の求めに応じて翻訳した。序文で、キリスト教の訓練を受けていないものに原文の物語を読むようにすることで、単純で誤った解釈への門を開くことになるのを心配した。

アルフリッチは、修道院長の立場からキリスト教の聖典を世俗的な教育の目的に用いることよりも、聖職者の教育を重視した。そのために古英語による聖典の翻訳の必要性があるとは考えなかったと思われる。

2 アルフリッチの翻訳とベネディクト会改革

アルフリッチは、自分自身にとって、聖典の翻訳はどのような意義があると考えていたのだろうか。Lees (1991) から引用する。

As is the case with the generic division of Anglo-Saxon writing into poetry and prose, the tendency to subdivide the prose corpus into anonymous and named collections results in a hierarchy of critical value, which in this case is confirmed by dating and the methods of source study. Relatively speaking, the prose is easier to date than the poetry, since the implementation of the Benedictine reform offers a practical guideline to homiletic production. The earlier Blicking and Vercelli collections represent the anonymous tradition of homiletic prose, most often held to be preriform. Evidence of source study for these works indicates an emphasis on apocrypha, often featuring Insular or Irish concerns and topoi and a generally unremarkable Latinity. The later authored collections of Ælfric and Wulfstan represent the newer tradition of homiletic prose, influenced by the revival of Latinity and ecclesiastical orthodoxy generated by the Benedictine reform. These works consistently demonstrate a much higher level of Latin scholarship, a concern with accuracy and authority, and a more consistent use of form, whether exegetical or catechetical. Since it is easier to assess the works of Wulfstan and Ælfric in relation to their sources, it is no surprise that their works are better known.

(Lees 1991: 25)

ベネディクト会の改革の実行は説教の制作に実際的な指針を提供する。以前のブリッキング説教集とヴェルチエリ説教集の原典は聖書外典に重点がケルトやアイルランドの関心やトポス（注・複数）と平凡なラテン語風らしきがあるが、後代のアルフリッチやウルフスタンの説教はベネディクト会の改革によって生まれたラテンと教会の正統性の復活に影響されたものである。

聖典の翻訳は、アルフリッチ自身にとってベネディクト会の改革の中で世俗化として避けられるべきであったと考えられよう。Lees (1999) から続けて引用する。

The period of the late-tenth and early-eleventh centuries is, after all, that of the Benedictine reform or revival, which witnesses an increasing monastic purchase on the church and its copartner, the ruling dynasty of the West Saxons fortified by the premises and goals of the Benedictine rule. As the term revival suggests, the theological, liturgical, and doctrinal content of the homilies is most often understood in terms of its relation to prior movements ... and the prior authority of the Church Fathers. (Lees 1999: 26)

一〇世紀と一一世紀初期はベネディクト会改革の時期で教会の王室からの収益の増加と、ベネディクト会則の前提と目的によって強化されたウェスト・サクソン王室の支配を経験する。「復活」という言葉が示唆するように、その説教の神学的、典礼的、教義的内容は以前の運動と教父のより重要な権威との関係で理解される。

Ælfric was a product of the Benedictine Reform, which showed some ambivalence about translation. The reformers wanted both to regulate and control the texts that were read, glossed, and interpreted; at the same time, the goal (realized most fully in Ælfric's generation) of making more texts available to more people generated an inherent tension with the idea of control. This tension emerges clearly in Ælfric's own writings about translation. The overriding need was to maintain strict limits on interpretation - but how? Institutionally, the answer was to choose the right people as teachers, to train them properly, to read works in the approved canon, and to follow the right methods of exegesis.

(Stanton 2002: 175)

アルフリッチは、翻訳にある両面価値を示すベネディクト会改革の申し子である。改革者たちは読まれたり、語彙が付けられたり、翻訳されたりするテキストを規制し、統制すると同時に、より多くの人びとに利用できるようにする目標は統制の概念と内在的な緊張を産み出す。この緊張はアルフリッチ自身の翻訳について書いたものに顕在化している。翻訳に厳格な制約を保つことが最優先で、是認されたカノンで読み、積義の正しい方法に従うために適正な人びとを選んで教師にし、適切に訓練するためであった。

「文法家」アルフリッチは、聖典翻訳の規範を示したいと願い、翻訳はベネディクト会改革を体现することであると考えられる。つまり、聖典の翻訳は原典に忠実であることよって、内容を忠実に伝えなければならないという原則があり、その前提として聖職者の教育が重要だと考えたと推測できる。

八 アンブロ・サクソン時代のキリスト教の終焉と遺産

聖典翻訳を進めたアルフリッチは古英語による散文体による説教を確立したが、イングランドが再びヴァイキングによって制圧される事態に際し、ヨーク大主教ウルフスタンによる説教が修道院の外のイングランド全国民に向けて発せられた。

1 ウルフスタンの説教

デンマーク王スウェインは、ヴァイキングを募りイングランド全域を制圧して、一〇一三年スウェインはイングランド王になった。ヨーク大主教であったウルフスタンは、デー人の侵攻と国土の荒廢に際して、イングランド国民に向けて説教を行った。その説教は文学的名声が高い。Swanton (1993) による現代英語訳を引用する。

THE SERMON OF 'WOLF' TO THE ENGLISH WHEN THE DANES PERSECUTED THEM MOST, WHICH WAS IN THE YEAR IOI4 FROM THE INCARNATION OF OUR LORD JESUS CHRIST
Beloved men, recognize what the truth is: this world is in haste and it is drawing near the end and therefore the longer it is the worse it will get in the world. And it needs must thus become very much worse as a result of the people's sins prior to the advent of Antichrist; and then, indeed, it will be terrible and cruel throughout the world. Understand properly also that for many years now the Devil

has led this nation too far astray, and that there has been little loyalty among men although they spoke fair, and too many wrongs have prevailed in the land. ...

(Swanton (Trans.) 1993: 178-9)

「デーン人に迫害されるイギリス人に対するウルフスタンのキリスト生誕一〇一四年の説教」では、世界の終末と、反キリスト教者(デーン人)の到来を人びとの罪の結果であるとしてウルフスタンは終末観に立って説教を行っている。

Magennis (2011) からウルフスタンの説教の性格について引用する。

The Sermon of the Wolf to the English is an urgent call for the people of the English nation — the English nation is now clearly understood to be both a political and a conceptual entity — to repent their sinful ways in what is a time of social and spiritual crisis. The Sermon is not, like most of Ælfric's homilies, a sermon for a particular church occasion but is a 'general' sermon that arises from Wulfstan's perception of the distressing of state of England at a time of disorder and lawlessness.

(Magennis 2011: 141-2)

ウルフスタンの説教は、イングランドの無秩序で無法な悲惨な状況の認識から生まれた教会外の全イギリス国民のための説教であって、教会の歳時的な用途のためのアルフリッチの説教とは異なっている。ノルマンディーに亡

命したエセルレッド2世王 (Æthelred II、在位九七八—一〇一三、一〇一四—一六) に代わり、ウルフスタンの説教は国民へのメッセージであった。王権の衰退に伴い、教会は修道院的枠組みを越えて民衆への関心を持つことを責務としたことは後のウィクリフ派による前宗教改革の先駆けとなった。¹⁾

2 アングロ・サクソン時代のキリスト教の遺産——説教文体の伝統

ウルフスタンの説教文体は、遺産として現代まで受け継がれ、一九六三年のワシントン行進の際に行われた M. L. キング牧師の「私には夢がある」²⁾ はさうした例である。Orchard (1999) から引用する。

The rhythmical and formulaic aspects of Wulfstan's style are of particular interest since they can be matched closely with those of more recent 'prose' authors who are demonstrably composing within a long-established and ultimately oral tradition, namely a group of African-American preachers, whose sermons have recently been studied in detail. ... Wulfstan regularly peppers his sermons [with the bywords] ...: 'gecnawe se be cunne' ('let him recognize it who can': Homilies v.24, v.32; xxa.45, xxa.84; xxb.59, xxb.96; xxc.50, xxc.99); 'gelyfe se be wille' ('let him believe it who will': Homilies vi.196; xvn.79; xxa.77; xxb.88; xxc.84); 'understande se be wille' ('let him understand it who will': Homilies xc.114; xxa.80; xxb.92; xxc.95); 'understande se be cunne' ('let him understand it who can': Homilies xxb.105; xxc.107); 'gime se be wille' ('let him understand it who will': Homilies xi.99, xi.188; xvn.16; xix.84; xxb.11); 'soð is þæt ic secge' ('it is true what I am saying': Homilies ix.143; xi.137; xvn.65;

xviii.74; xxa.33; xxb.39; xxc.187; xxi.io). ...The soaring peroration of Martin Luther King's 'I have a

dream' speech, delivered in Washington on 28 August 1963, is a masterpiece of rhythmical discourse orally delivered, but it also demonstrates the way in which a speaker well-versed in an oral tradition ...

So let freedom ring from the prodigious hilltops of New Hampshire.

Let freedom ring from the mighty mountains of New York.

Let freedom ring from the heightening Alleghenies of Pennsylvania.

Let freedom ring from the snow-capped Rockies of Colorado.

Let freedom ring from the curvaceous slopes of California.

But not only that.

Let freedom ring from Stone Mountain of Georgia.

Let freedom ring from Lookout Mountain of Tennessee.

Let freedom ring from every hill and molehill in Mississippi, from every mountainside, let freedom ring.

And when this happens, when we allow freedom to ring, when we let it ring from every village and every hamlet, from every state and every city, we will be able to speed up that day when all of God's children - black men and white men, Jews and Gentiles, Protestants and Catholics — will be able to join hands and sing in the words of the old Negro spiritual, 'Free at last! Free at last! Thank God

Almighty, we are free at last!

(Washington, *Testament of Hope*, p. 220)

(Orchard 1997: 111-2)

ウルフスタンの説教で用いられた常套句は、キング牧師の“*I have a dream.*”の演説にもアングロ・サクソン時代のキリスト教から続く口頭による説教の伝統が実演されている。

九 結語

中世のウイクリフによる聖書翻訳とそれを契機として起こった社会改革を目指したワット・タイラーの乱は、前宗教改革として位置づけられている。しかし、既にアングロ・サクソン時代に古英語による聖書翻訳が行われ、イングランドの国民に向けて説教が発せられたことは、アングロ・サクソン時代の聖書翻訳や教育改革・宗教改革はイングランドにおいて中世に引き継がれ、ウイクリフの聖書翻訳やワット・タイラーの乱を予見していたという仮説を提示したい。

聖書翻訳は聖書原理主義と結びつき、社会改革運動の契機になってきたことは歴史的に例証されることである。アングロ・サクソン時代のイングランドで起こった教育・宗教改革が後世のアメリカにおけるプロテスタンティズムの源流になったとすれば、アングロ・サクソン時代のキリスト教文献は、文献学的な研究のみならず、歴史・社会的な資料としても探究されるべき分野である。ブリテン島におけるベネディクト会改革に関する詳細を取り上げ

られなかった。今後の課題としては、教皇グレゴリーによる『牧者の慰め』(Pastoral Care)の詳しい検討を期したい。

注

- (1) 本稿は、二〇一九年一〇月二三日に聖学院大学ヴェリタス館教授会室で行なわれた「キリスト教と諸学の会」における同題名の発表に基づいて執筆したものである。清水正之学長、小池茂子副学長、森田美千代大学院客員教授、菊地順キリスト教センター所長、柳田洋夫大学チャブレンを始めご出席いただいた先生方、また、当日司会をいただいた村松晋人文学部長に心より感謝申し上げる。
- (2) BC五五、五四年にシーザーによるブリテン島へのローマ帝国の侵略は失敗したが、AD四三年にクラウディウス帝がスコットランドを除いてイギリス諸島を征服した。
- (3) ローマがブリテン島で支配していた地域は、ブリテン島からローマが築いた国境で隔てられたスコットランドを除いた地域である。イングランド北部とスコットランドのあいだの国境には、現在でもハドリアヌス帝が築かせたハドリアン・ウォールが残っている。
- (4) アウグステイヌスと表記する立場もあるが、教父アウグステイヌスと混同される恐れがあるので、英語名でオーガステインと表記する。
- (5) ベーダは『英国民教会史』(*Historia Ecclesiastica Genuis Anglorum*)をラテン語で書いたが、アルフレッド王の時代に、アルフレッド・サークルと呼ばれる集団によって古英語訳が作られた。ここでは、古英語版を引用する。
- (6) キリスト教の国教化は、一般的にはAD三九二年、テオドシウス帝がキリスト教を国教とし、異教を禁止したことを指す。
- (7) 『アングロ・サクソン年代記』MS. A. は、ケンブリッジ大学コーパスクリスティコレッジの学寮長で、カンタベリー大主教であったマシュー・パーカー(Matthew Parker)が収集し、現在もコーパスクリスティコレッジ、パーカー・

ライブラリーに所蔵されている。

- (8) 聖オーガスティンと修道士の一行が実際にブリテン島に上陸したのは五九七年である。
- (9) 例えば、『アルフリッチ説教集』には、八六九年にヴァイキングの侵略によって捕らえられた聖エドマンド (St Edmund) 殉教王がヴァイキングから棄教を強要されたが、これを拒否し矢の的にされて殉教した様子が述べられている。
- (10) 『リンディスファーン福音書』は大英図書館 (the British Library) ウェブサイト (DISTISED MANUSCRIPTS) で閲覧できる (Cotton MS Nero D. IV, f. 29r)。XPI はギリシヤ文字でそれぞれ chi rho iota び'キリストを表す。なお XP (カイロー) だけでも「キリスト」を表す。
- (11) 一三八一年に起きたワット・タイラーの乱の精神的指導者は、ウィクリフを信奉する牧師ジョン・ボールであった。
- (12) この演説は、一九六三年八月二八日にワシントン D・C・リンカーン記念堂で行われた。

参考文献

- Baker, P. S. (2012). *Introduction to Old English*. Third Edition. Southern Gate, Chichester, West Sussex: Wiley-Blackwell.
- Bately, J. M. (ed.) (1986). *The Anglo-Saxon Chronicle. A Collaborative edition. Volume 3 MS A*. Cambridge: D. S. Brewer.
- Brown, M. P. (2003). *Painted Labyrinth: The World of the Lindisfarne Gospels*. London: the British Library.
- Craford, S. J. (1922, reprinted 1990). *The Heptateuch: Eifric's Treatise on the Old and New Testament*. EETS No. 160. Early English Society. London, New York, Toronto: Oxford University Press.
- Lees, Clare A. (1999). *Tradition and Belief: Religious Writing in Late Anglo-Saxon England*. Minneapolis, London: University of Minnesota Press.
- Magenis, H (2011). *The Cambridge Introduction to Anglo-Saxon Literature*. Cambridge: Cambridge University

- Press.
- Michell, B. and Robinson, F. C. (2008). *A Guide to Old English*. Seventh Edition. Maldon, MA, Oxford, UK, Victoria, Australia: Blackwell Publishing.
- Miller, T. (ed.) (1890, reprinted 1990) *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*. EETS. No. 95. Early English Society. London, New York, Toronto: Oxford University Press, Millwood, N.Y.: Kraus Reprint Co.
- (ed.) (1890, reprinted 1990) *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*. EETS. No. 95. Early English Society. London, New York, Toronto: Oxford University Press, Millwood, N.Y.: Kraus Reprint Co.
- Muinzer, L. (trans.) (1970). [Ælfric's] Preface to Genesis. In Robertson, D. W. (ed.) *The Literature of Medieval England*. New York: McGraw-Hill, 165–7.
- Orchard, A. Oral Tradition. In O'Brien O'Keefe, K. (ed.) *Reading Old English Texts*. Cambridge: Cambridge University Press, 101–123.
- O'Neill, Patrick P. (ed. and trans.) (2016). *Old English Psalms*. Cambridge, Massachusetts, London, England: Harvard University Press.
- Pulsiano, P. (ed.) (2001). *Old English Glossed Psalms: Psalms 1–50*. Toronto, Buffalo, London: University of Toronto Press
- 大沢一雄 (一九九二) 『アングロ・サクソン年代記研究』。株式会社ニューカレンインターナショナル。
- Stanton, S. (2002). *The Culture of Translation in Anglo-Saxon England*. Cambridge: D.S. Brewer.
- Swanton, M. (ed. and trans.) (1993). *Anglo-Saxon Prose*. The Everyman Library. London: J. M. dent,
- 高橋博 (訳) (二〇〇八) 『スーダ英国民教会史』。講談社学術文庫一八六二。株式会社講談社。
- Trehanne, T. (ed.) *Old and Middle English: An Anthology*. Third Edition. The Atrium, Southern Gate, Chichester, West Sussex: Wiley-Blackwell.